

【目次】

■序論

- 1-1 研究背景
- 1-2 研究目的
- 1-3 研究対象と本論における用語の定義
- 1-4 既往研究と本研究の位置づけ
- 1-5 研究方法

■本論

第2章 18世紀から19世紀にかけてのイギリス

- 2-1 はじめに
- 2-2 時代背景
- 2-3 イギリスの邸宅
- 2-4 小結

第3章 ドールハウス概要

- 3-1 はじめに
- 3-2 "ミニチュア"の世界とドールハウス
- 3-3 ドールハウスの目的
- 3-4 16世紀から20世紀にかけてのドールハウス
- 3-5 小結

第4章 職人の作品としてのドールハウス

- 4-1 はじめに
- 4-2 ドールハウス職人
- 4-3 ドールハウスの依頼主
- 4-4 小結

第5章 職人によるドールハウスの製作方法

- 5-1 はじめに
- 5-2 作業工程
- 5-3 材料
- 5-4 道具
- 5-5 構造
- 5-6 図面、指南書
- 5-7 小結

第6章 工業品・大量生産製品としてのドールハウス

- 6-1 はじめに
- 6-2 ドールハウスの小売店、会社の設立
- 6-3 製作方法
- 6-4 コレクターの登場
- 6-5 小結

第7章 建築における工業化—産業革命による建築の変化

- 7-1 はじめに
- 7-2 テューダー朝(1485-1603)
- 7-3 ジェイムズ朝(1603-1625)
- 7-4 スチュアート朝(1603-1714)
- 7-5 ジョージ朝(1714-1830)
- 7-6 ヴィクトリア朝(1837-1901)
- 7-7 小結

第8章 考察：ドールハウスと建築における工業化の比較

第9章 結論

参考文献

図版出典

序論

1-1 研究背景

現在、農民や職人は工業化され、伝承文化は消滅しつつある。(中略)職人芸術を復活させようとする今日の様々な試みは、辛うじて観光用芸術に到達しているにすぎない。ハ・ヴァラニヤック、M・C・ヴァラニヤック(編著)『ヨーロッパの職人生活と伝承』(自由社、1988)

とあるように、近代化が進む以前には、建築に限らず多くの面で活躍していた様々な職人たちも、現代では工業化や効率化、コストパフォーマンスの向上などの理由から、以前ほど重用されなくなった。また、活躍の場もなくなっていくと共に、職人を目指す若者も減少し、技術や工芸が失われかねない状況に陥っている。

日本では、どのように職人やその技術、工芸を残していくかという課題に対して、新しいアプローチでその技術を用いたり提案したりすることで、新規顧客の獲得を目指すというような解決方法が多くとられている。しかし、その成果はあまり芳しくなく、多くは跡継ぎがいらない高齢の職人が技術を守っている状態で、職人や技術が失われていくのも時間の問題である。

日本では、どのように職人やその技術、工芸を残していくかという課題に対して、新しいアプローチでその技術を用いたり提案したりすることで、新規顧客の獲得を目指すというような解決方法が多くとられている。しかし、その成果はあまり芳しくなく、多くは跡継ぎがいらない高齢の職人が技術を守っている状態で、職人や技術が失われていくのも時間の問題である。

職人や技術、工芸と人々の暮らしの関係はどのような形が理想的なのだろうか。どのような形であれば工芸や技術は失われないのだろうか。職人やその技術、それを用いて作られた作品が、その技術が根付く土地やそこに住む人々とのような関わり合いの中で歴史を重ねてきたのかを美術工芸品であるドールハウスを通してみる。

1-2 研究目的

本論では美術工芸品であるドールハウスを取り上げ、ドールハウスを実際の建築を縮小したものとして捉えた上で、職人やその技術が廃れていく一番はじめのきっかけとして考えられる産業革命の前後で起こった変化を明らかにし、実際の建築における変化と比較して、分析することを目的とする。

1-3 研究対象と本論における用語の定義



図1 ハスケルハウス 18世紀後半

美術工芸品を対象として研究を進める。美術工芸品の中でも、様々な職人が関わっている作品であり、使用者のもとで手を加えられて変化しながら残っていくという特徴があるドールハウスを取り上げることとした。本論で扱う「ドールハウス」とは、主として1/12の縮尺でつくられた小さな家のことで、人形や家具が任意に置かれた美術工芸品である。ドールハウスの中でも、18世紀から19世紀にかけてのイギリスの、家を模したタイプのものを対象とする。

1-4 既往研究と本研究の位置づけ

(1) ドールハウスコレクションを紹介するもの

- 吉野君子「マイクロインテリア：ドールハウスの世界」(2000) 5p
ドールハウスの歴史、素材についての紹介。おもに王妃のドールハウスなど精密なものについての紹介。
- 梅本 建夫「ドールハウスとメルヘンの世界」(1996) 13p.
ドールハウスの歴史とドールハウスを所蔵している博物館、美術館についての紹介。

(2) ドールハウスがもたらす効果や役割を述べるもの

- ▽Annette Cremer, A Miniature State: The Dollhouse City of Princess Augusta of Schwarzburg(1666-1751), 2015 20p.
コレクションの存在の社会政治学的、また個人的な理由と、その歴史的な背景について述べる。
- ▽A. Monterey Blair, The Roles of the Dollhouse throughout History: An Art, a Craft, a Toy, 2015 19p.
工芸、玩具としてのドールハウスの役割の変化の意味することを調査し、ドールハウスの歴史の調査および美術と工芸両方の作品の分析を通して、ドールハウスをフェミニスト芸術運動のシンボルとして捉える。
- ▽Nancy Wei-Ning Chen, Playing with Size and Reality: The Fascination of a Dolls' House World, 2014 18p.
メイドまたは少女たちを対象とした教育的なモデルとしてではなく、想像力や創造性、主体性を育む手段、場としてのドールハウスを取り扱い、ドールハウスのイメージが家庭を描写する時にどれほど重要なのかを実験を通して考え、さらにドールハウスの文学表現とミニチュアの世界での子供の冒険の描写がどれだけ大きさを対比させているのか、どれだけ指導者の想像の世界と現実の世界の境界についての無意識の不安を引き起こすのかについて議論する。
- ▽Lynne Murray, Matthew Woolgar, Stephen Briers, Alison Hipwell, Children's Social Representations in Dolls' House Play and Theory of Mind Tasks, and their Relation to Family Adversity and Child Disturbance, 2001 22p.
ドールハウスで遊ぶことが子供の情操教育や様々な経験をするのにも関係していることから、子供の行動に関する問題の基盤とすさんだ家族関係の精神病理学を解明し、セラピー治療の介入の方法を探る。

(3) ドールハウスから文化、歴史を読み解くもの

- 赤澤 真理, 兼田 美咲, 楊 昱「オランダにおけるドールハウスに示された日本の屏風」(2015) 14p.
アムステルダム国立美術館に収蔵されている2つのドールハウスの紹介と、そこに見られる漆のティーテーブル・陶磁器・屏風などから、当時のオランダにおける東洋趣味を理解する上で重要な資料となることを示す。
- ▽Amelie Hastie, History in Miniature Colleen Moore's Dollhouse and Historical Recollection, 2001 46p.
無音映画のスター Colleen Moore がつくらせて保存・活用していた豪華なドールハウスは、その時代その場所が閉じ込められたものであるので、映画と同じような体験をもたらすことを述べる。

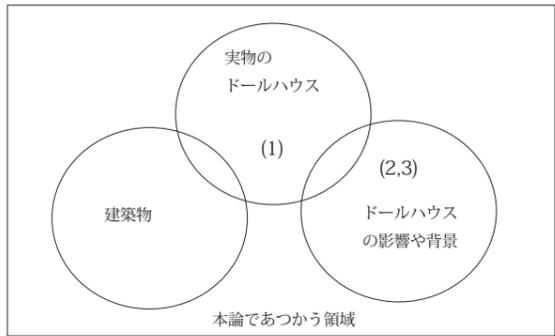


図2 本論の位置付け

(4) 本研究の位置付け

以上の既往研究は、ドールハウスについてさまざまな角度から研究したものを取り上げた。(2)(3)のように、ドールハウスからもたらされるもの及び読み解けるものについての研究はされているものの、ドールハウスそのものについての研究はない。また、(1)のようにドールハウス自体を議題にしている、その紹介に留まっている。したがって、本研究の位置付けは、ドールハウスそのものを取り扱って、主に文献調査を通して、その変遷について明らかにするものである。

1-5 研究方法

第2章では、本論で研究対象とする18世紀から19世紀にかけてのイギリスのドールハウスの背景となる18世紀から19世紀にかけてのイギリスの社会的状況や邸宅、住み方について、文献調査などから明らかにする。第3章では、ドールハウスとはどういうものなのか、どのような歴史があるのかについて、文献調査などから述べ、本論で研究対象とする18世紀から19世紀にかけてのイギリスのドールハウスの位置付けを明らかにする。第4章では、職人がつくった美術工芸品としての側面が強い初期のドールハウスを取り上げて、職人の置かれた環境や人々との関わり合いについて、文献調査などから明らかにする。第5章では、職人のつくった美術工芸品としてのドールハウスの構造や材料についての分析に基づいて製作方法を明らかにする。第6章では、贅沢な趣味であったドールハウスが中流階級や庶民の手に届く工業品・大量生産品になる過程を文献調査などから明らかにする。第7章では、本論で扱うドールハウスの比較対象である18世紀から19世紀にかけての建築が工業化前後でどのように変化したのかを文献調査などから明らかにする。第8章では、第2章から第7章までで明らかになったことを踏まえて、ドールハウスと建築における工業化の比較、分析を行う。

本論

第2章 18世紀から19世紀にかけてのイギリス

本論で研究対象とする18世紀から19世紀にかけてのイギリスのドールハウスの背景となる18世紀から19世紀にかけてのイギリスの社会的、経済的、政治的状況、住宅を述べ、本論で研究対象とする18世紀から19世紀にかけてのイギリスのドールハウスは、社会的、経済的、政治的にさまざまな変動のあった時代のものであることを示す。また、ドールハウスのモデルにもなったであろう当時のイギリスの邸宅は、イギリス文化の中心部分の一端を担っており、イギリスのドールハウスとカントリーハウスの関係は密接なものであることを明らかにする。



図3 カースルハウード

第3章 ドールハウス概要

文献調査などからドールハウスとはどういうものなのか、どのような歴史があるのか、さらにはどのような目的で製作、使用されていたのかについて述べる。ドールハウスはドイツ、オランダで貴族や上流階級が楽しむ高級な美術工芸作品として始まり、少しずつ趣味として成熟し、イギリスで発展、文化として大きく花開いた。また、本論で取り扱う研究対象である18世紀から19世紀にかけてのイギリスの家の形を模したタイプのドールハウスは、その後のドールハウスの主流のスタイルにつながる原型となったこと、また、産業革命、工業化が始まってもすぐに職人による工芸品としてのドールハウスがつくられなくなったわけではなくその後も存在し、工業品としてのドールハウスは少しずつ現れてきたことを明らかにする。



図4 18世紀の部屋の再現空間 1700-1800年

第4章 職人の作品としてのドールハウス

職人がつくった美術工芸品としての側面が強い初期のドールハウスを取り上げて、職人の置かれた環境や人々との関わり合いについて述べる。職人の中には高い地位につくものもいて様々な立場の職人がいたと考えられること、ドールハウスの依頼主は女性の場合が多く、自ら依頼する場合には自分の思ったとおりのドールハウスに仕上げやすかったと考えられることを明らかにする。

第5章 職人によるドールハウスの製作方法

職人のつくった美術工芸品としてのドールハウスの構造や材料についての分析に基づいて製作方法を明らかにする。実際に家を建てる場合と比較して整理すると、ドールハウスでは精緻に再現することを目指しているため大まかな流れや構成方法は同じであったが、決定的な違いが3点あることを明らかにする。1点目は、工程のなかで組み立てる前に内装仕上げをする点、2点目は、全体が小さく軽いため、小屋組などが省かれた簡素で素朴な構造でつくられている点、3点目は、家の知識がない家具職人などもつくっていた可能性がある点である。

第6章 工業品・大量生産品としてのドールハウス

贅沢な趣味であったドールハウスが中流階級や庶民の手に届くものになる過程を述べる。はじめは貴族や上流階級でのみ嗜まれ楽しまれていたドールハウスも時代が下るにつれて中流階級、そして庶民にも楽しめる趣味になっていった。庶民にまで普及するのは、工業化、産業革命による大量生産で安価に手に入るミニチュアやドールハウスの登場が不可欠であることを明らかにする。

第7章 建築における工業化ー産業革命による建築の変化

王朝ごとの様式とともに構造面や素材面、技術面での変化を見ていくことで、本論で対象とするドールハウスの比較対象である18世紀から19世紀にかけての建築が工業化前後でどのように変化したのかを述べる。18世紀から19世紀においては、様式がさまざまなに変化しながらも新しい素材や技術が導入され、より安価に手軽に空間をつくることが追求されたこと、また、構造に関する原理や算出方法が発見、考案されても、実際の設計に導入される場合はほとんどなく、設計者や技術者それぞれの感覚や経験によって設計、施工されていた時代が長く存在したことを明らかにする。

第8章 ドールハウスと建築における工業化の比較

第2章で明らかになった18世紀から19世紀にかけてのイギリスの社会的状況、邸宅、住み方を踏まえて、第3章から第6章で明らかになったドールハウスの変化、美術工芸品としての側面および工業品としての側面と、第7章で明らかになった18世紀から19世紀にかけてのイギリスにおける産業革命前後における建築の変化を比較して、それぞれの変化の対応や影響を考察した。建築において材料や工法に変化が見られる場合でも、ドールハウスでは木材が材料として最適であったため大きな変化としては現れなかったが、建築において複製によってより経済的に装飾をつくることができるようになった際もドールハウスでは印刷することで大胆に装飾を手軽に再現するなど、直接的な対応はないにしる影響を受けていると結論づけられる。また、建築ではプレハブ工法として現れた効率化、インスタント性はドールハウスにおいてはキットの登場として現れたと言える。

参考文献・出典

参考文献

- <ドールハウスに関するもの>
- 新美康明『ドールズハウス Doll's House ミニチュア世界の扉を開く』（新樹社、2012）
 - ハリーナ・バシエルブスカ (安原実津訳)『ドールハウス：ヨーロッパの小さな建築とインテリアの歴史』（バイインターナショナル、2017）
 - フェイス・イートン (成田明美訳)『世界一くわしいドールハウス図鑑』（日本ヴォーグ社、1995）
 - ハリー・デイヴィス『ターシャ・チューダーのドールハウス ミニチュアの世界』（文芸春秋、2000）
 - Vivien Greene, The Vivien Greene DOLLS' HOUSE COLLECTION (CASSELL, 1995)
 - Valerie Jackson Douet, Doll's houses The collector's guide (Magna Books, 1994)
 - Mary Stewart-Wilson, Queen Mary's Dolls' House (Abbeville Press, 1988)
 - Lucinda Lambton, The Queen's Dolls' House: A Dollhouse Made for Queen Mary (Royal Collection Trust, 2010)
 - Royal Collection Publications, Queen Mary's Dolls' House: Official Guidebook (Royal Collection Trust, 2010)
 - John Martin Robinson, Queen Mary's Dolls' House Official Souvenir Guide (Souvenir Guides) (Scala Arts Publishers, 2012)
 - Kulturbetrieb der Stadt Arnstadt (アルンシュタット城博物館), Miniature Town "Mon plaisir", <http://www.kulturbetrieb-arnstadt.de/en/museum-educational-service/mon-plaisir/28-englisch/schlossmuseum-en/156-miniature-town-mon-plaisir.html>, 2018/10/15閲覧

- <イギリスに関するもの>
- 木下京、窪田憲子、久守和子編著『イギリス文化 55のキーワード』（ミネルヴァ書房、2009）
 - A・ヴァラニヤック、M・C＝ヴァラニヤック (蔵持三也訳)『ヨーロッパの庶民生活と伝承』（白水社、1980）
 - A・ブリックズ (村岡健次、河村貞枝訳)『ヴィクトリア朝の人びと』（ミネルヴァ書房、1988）
 - ロイ・ボーター (目黒公和訳)『イングランド 18世紀の社会』（法政大学出版局、1996）
 - ジョイス・M.エリス (松塚俊三、小西恵美、三嶋眞貴子訳)『長い18世紀のイギリス都市 1680-1840』（法政大学出版局、2008）
 - 小林博一、飯田操、桂山康司編『イギリス文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2009）
 - 川北稔、藤川隆男編『空間のイギリス史』（山川出版社、2005）
 - 加藤憲市、加藤治『コンプトン 英国史・英文学史』（大修館書店、1996）
 - リチャード・B・シュウォーツ (玉井東助、江藤秀一訳)『十八世紀ロンドンの日常生活』（研究者出版、1990）
 - 佐久間康夫、中野葉子、太田雅考編『概説イギリス文化史』（ミネルヴァ書房、2002）
 - 柴田卓弘『十九世紀イギリス史』（早稲田大学出版部、1969）
 - 井野瀬久美恵『イギリス文化史』（昭和堂、2010）
 - 水谷三公『英国貴族と近代 持続する統治 1640-1880』（東京大学出版、1987）
 - R.J.ミッチェル (M.D.R.リーズ、松村起訳)『ロンドン庶民生活史』（みすず書房、1988）
 - A・ヴァラニヤック、M・C＝ヴァラニヤック (蔵持三也訳)『ヨーロッパの庶民生活と伝承』（白水社、1980）
 - ブリチッシュ・ライブラリー編『イギリスのヴィンテージ広告』（グラフィック社、2016）
 - ジョン・セイモア (小泉和子、生活史研究所訳)『イギリスの生活誌 道具と暮らし』（原書房、1989）
 - 久我真樹『英国メイドの世界』（講談社、2010）
 - シャーン・エヴァンス (村上リコ訳)『メイドと執事の文化誌』（原書房、2012）
 - パメラ・ホーン (子安雅博訳)『ヴィクトリアン・サーヴァント 階下の世界』（英宝社、2005）
 - 小野まり『英国インテリアの歴史』（河出書房新社、2013）
 - 小野まり『英国アンティークの世界』（河出書房新社、2017）
 - 吉村典子、川端有子、村上リコ『ヴィクトリア時代の室内装飾』（LIXIL 出版、2013）
 - 片木篤『建築巡礼 11 イギリスのカントリーハウス』（丸善、1988）
 - 田中亮三『英国貴族の城館 カントリー・ハウスのすべて』（河出書房新社、2008）
 - 岩田純子、川端有子『英国レディの世界』（河出書房新社、2011）
 - 田中亮二『英国貴族の暮らし』（河出書房新社、2009）
 - 石井美樹子『イギリスの王室』（河出書房新社、2007）

- <建築に関するもの>
- チャールズ・シンガー、E・J・ホームヤード、A・R・ホール、トレヴァー・I・ウィリアムズ編 (高木純一、田中英、田辺阪太郎、平田 図、八杉龍一訳編)『技術の歴史 第5巻 ルネサンスから産業革命へ上』（筑摩書房、1964）
 - チャールズ・シンガー、E・J・ホームヤード、A・R・ホール、トレヴァー・I・ウィリアムズ編 (高木純一、田中英、田辺阪太郎、平田 図、八杉龍一訳編)『技術の歴史 第8巻 産業革命 下』（筑摩書房、1964）
 - 藤井恵介編『建築の歴史・様式・社会』（中央公論美術出版、2018）
 - ピーター・マレー (桐敷真次郎訳)『図説世界建築史 10 ルネサンス建築』（本の友社、1998）
 - クリスチャン・ノベルグ・シュルツ (加藤邦明訳)『図説世界建築史 11 バロック建築』（本の友社、2001）
 - クリスチャン・ノベルグ・シュルツ (加藤邦明訳)『図説世界建築史 12 後期バロック・ロココ建築』（本の友社、2003）
 - ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン (土居義浩訳)『図説世界建築史 13 新古典主義・19世紀 建築 (1)』（本の友社、1998）
 - ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン (土居義浩訳)『図説世界建築史 14 新古典主義・19世紀 建築 (2)』（本の友社、2002）

- <木材に関するもの>
- ヨアヒム・ラートカウ (山縣光品訳)『木材と文明』（築地書館、2014）
 - ピーター・ブランドン (熊崎実編訳)『イギリス人が見た日本林業の将来』（築地書館、1996）
 - ミシェル・ドヴェーズ (猪俣禮二訳)『森林の歴史』（白水社、1973）
 - カール・ハーゼル (山縣光品訳)『森が語るドイツの歴史』（築地書館、1996）

- <木工道具に関するもの>
- ディドロ、ダランベール編 (桑原武夫訳)『百科全書』（岩波書店、1971）
 - 村松貞次郎『道具と手仕事』（岩波書店、2014）
 - 渡邊品『大工道具の文明史』（吉川弘文館、2014）
 - 柳澤誠一、「接着剤技術の系統化調査」国立科学博物館産業技術史資料情報センター編「国立科学博物館技術の系統化調査報告第17集」（国立科学博物館、2012）pp.367-444

- <職人に関するもの>
- Thomas Chippendale, The Gentleman and Cabinet-Maker's Director (printed for the author, 1754)
 - A.Hepplewhite and Co, The Cabinet-Maker and Upholsterer's Guide (Published by I and J. Taylor, 1789)
 - Thomas Sheraton, The Cabinet-Maker and Upholsterer's Drawing-Book (printed for the author, 1794)

出典

- 図1 新美康明『ドールズハウス Doll's House ミニチュア世界の扉を開く』（新樹社2012）p.63
- 図2 筆者作成
- 図3 BORDERS Journeys, Castle Howard, <http://www.bordersjourneys.co.uk/2016/07/26/castle-howard/> (2018.09.27閲覧)
- 図4 ハリーナ・バシエルブスカ (安原実津訳)『ドールハウス：ヨーロッパの小さな建築とインテリアの歴史』（バイインターナショナル 2017) p.127
- 図5 筆者作成

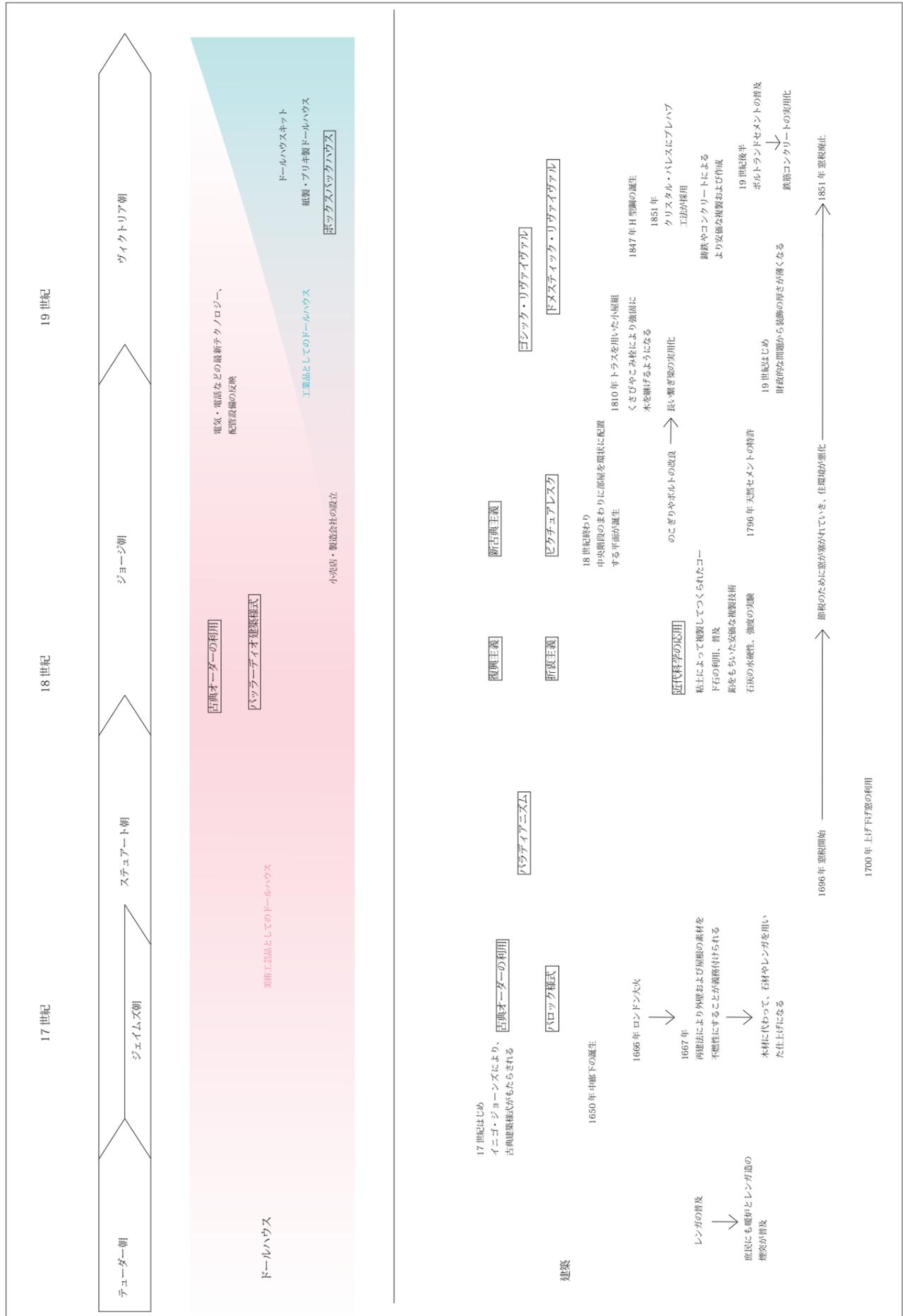


図5 ドールハウスと建築年表